

午前二時。街の喧騒から切り離された二十四時間ジムは、無機質な青白いLED照明に照らされ、静まり返っていた。

「……はぁ、……っ、ん、……っ」

私の不器用な呼吸音だけが、誰もいないフロアに虚しく響く。

(……やっぱり、この時間はいつも人がいなくていいや。あんまり汗だくの姿って、見られたくないし……)

最近、自分を変えたくて通い始めることにした。けれどお金をケチって無人ジムにしたから、マシンの使い方も合っているのか分からない。ネットで調べながら見よう見真似で数週間。成果が出ない焦りと、場違いな場所に来てしまったという後悔が、じわじわと胸を締め付ける。

私は俯き、滴る汗を拭いながら、次のマシンへ移

動しようと顔を上げた。

——その時だった。冷たい空気の中に、場違いなほど洗練された都会的な香りが混ざり込んだ。ベルガモットの爽やかさと、官能的なアンバーの重なり。

「……？」

入り口の方を見ると、黒のトレーニングウェアを着た男が立っていた。

鋼のようにしなやかな筋肉。肩幅の広さや、胸板の厚みが強調されたタイトな黒のタンクトップ姿は、圧倒的な色気を放っている。

(……だ、誰……？　すごく、綺麗な人……。モデルさんかな……)

名前も知らないその人は、広いフロアに他にもたくさん空きがあるというのに、迷いのない足取りで、私があたふたと座ったマシンの、すぐ隣に腰を下ろした。

カチャリ、とウェイトを調整する金属音が響く。私はあまりの緊張に、隣を見ることもできず、ただ固まってしまった。隣から伝わってくる、男の人の熱量。彼がセットをこなすたびに、規則正しく、けれど力強く繰り返される呼気。

（どうしよう、どうしよう……っ。隣に、あんなに格好いい人がいるなんて。私のこんな、汗だくで必死な顔、見られたくない……っ）

私は逃げるようにセットを再開したが、緊張で手元が狂いそうになる。セットの合間、彼がふと動きを止め、こちらに視線を向けてくるのを感じた。

「……すごい、一生懸命だね」

「……え、っ！？」

突然低く心地よい声が鼓膜を震わせた。隣の男は、私の乱れた呼吸と、恥ずかしさで赤くなったであろう顔を、面白がるようにじっと見つめている。

「最近入ったの？」

「まだ数週間くらいです……」

「そうなんだ」

「は、はい。……あの、私、次はあれをやるので…
…」

私は逃げ出すように、フロアの隅にあるスミスマシンへと移動した。

(……ここなら、大きなフレームの陰に隠れられるし……あんな綺麗な人から、少しは視線を遮れるはず……っ)

スミスマシンは構造上、大きな鉄枠に囲まれている。その空間に逃げ込めば、先ほど感じた彼の威圧感と、逃げ出したくなるような羞恥心から、ほんの少しだけ守ってもらえるような気がしたのだ。

私は震える手でバーの高さを調整し、自分の存在を消すように、ただ一心不乱に鉄の棒を握りしめた。

(早く終わらせて、帰ろう……)

震える手でバーを握り、いつもより少し重い負荷を設定した。あんな風に見つめられて、無意識のうちに自分を強く見せたかったのかもしれない。

「……んっ、んんっ……！！」

三回、四回。そして五回目を迎えようとした瞬間、肩にかかる重圧が、急に壁のように動かなくなった。

「あっ……！」

(上がら、ない……っ。どうしよう、潰れる……っ！！)

重力に押し潰されそうな恐怖が、私を支配する。バーベルが少しずつ、私の身体を床へと押し下げていく。

「……っ、たすけ……っ、て……」

声にならない悲鳴を上げた、その時だった。背後に熱が密着した。

「危ないよ」

耳元で甘い声が囁く。同時に私の肩の上で震えていた鉄の棒に、大きな、男の人の手が添えられた。

（さっきの人……！？）

彼は私の背中に、硬く鍛えられた胸板をぴったりと押し当てている。

私の髪をかすめる、彼の熱い吐息。彼がグイと力を込めると、絶望的な重さだったバーベルが嘘のように持ち上がり、カチャリ、と安全装置に固定された。

「……っ、あ……ありが、とう、ございます……」

「どういたしまして」

けれど、彼は背中を離そうとはしなかった。

それどころか、バーを支えていた腕を、そのまま私の脇の下へ滑り込ませるようにして、私の震える肩を包み込むようにして密着を深める。

スミスマシンの鉄枠と、彼の分厚い胸板。前後に逃げ場を塞がれた私は、まるで檻の中に閉じ込められた小動物のような心地だった。

「無理しすぎだよ」

「あ、あの、はなして……」

パニックになりながら、私は離れてもらおうと身を振った。けれど、彼は私を解放してはくれなかった。彼の両手は、まだ私の手の上からバーをしっかりと押さえている。私の背中と彼の胸が、ウェア越しに密着したまま。彼が呼吸をするたびに、その鼓動がトク、トク、と私の背中に直接伝わってくる。

「マシンの使い方、教えてあげる」

「……え？ で、でもっ……」

逃げようとする私の肩を、彼の大きな掌が優しく、けれど抗えない力強さで押し留める。

「……君、さっきから見てたけど、フォームがバラバラ。そんなんじゃ、身体を壊すだけだよ」

「あ、……す、すみません……っ」

彼は私の背中にぴったりと寄り添ったまま、教えるように私の腕の角度を調整し始めた。

「……俺は公翔。一応、ここの常連だからさ。放っておけなくて」

「き、公翔（きみと）……さん……っ」

（名前、公翔さんって言うんだ……。名前も格好いい……。じゃなくて、近すぎるよ……っ！！）

「普段は朝に来るんだけど……。夜はこんないい子がいるなんて、ね……♡」

公翔さんの身体から放たれる、都会的な香水と熱い体温が私を包み込む。彼は私の腰にそっと手を添